

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第57回

森の彫刻家 上床利秋

V字回復の二人

スポーツ選手が突然病気や怪我で、将来の成功を有望視されながらも力を発揮できないままにその世界をあきらめて去っていく事がある。東京オリンピックが一年間延期されたことで自分の実力のピークを保持することができないうでメダル獲得を逃した選手もいたことをマスコミは伝えていた。それが現実の世界というもののなにかもしれない。その厳しさの中で水泳の池江璃花子選手や大相撲の照ノ富士関は悲劇に遭遇しながらも懸命に病氣と闘いながら不可能とも思われたV字回復を遂げてきた。

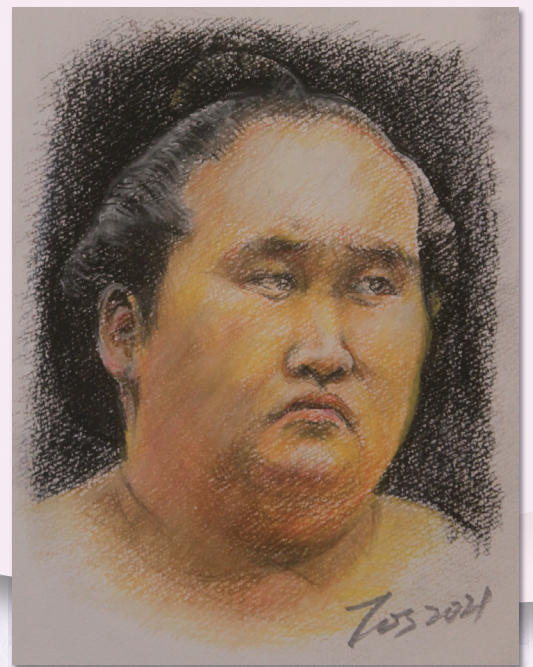


「池江璃花子選手」 筆者作 パステル

照ノ富士関はなかなかテレビ画面で笑う姿を見せない。まるで勝つて兜の緒を

の活躍も夢ではなくなつた。病気の再発がないことを祈りたい。

現代医学の発達が功を奏したおかげもあって池江璃花子選手は白血病から生還することができた。数十年前ならば確実に命を落としていた恐ろしい病氣である。退院直後の彼女の姿は見るからに痩せ細って、抗がん剤を服用しながらも懸命にリハビリしていたことはすでに読者も周知のことだろう。誰もが無理と思った東京オリンピック出場をかなえさせたのは疑いなく彼女の素直な心と強い信念の賜に違いない。成人したばかりでまだ若い。三年後のパリオリンピックで



「照ノ富士 春雄関」 筆者作 パステル

締めよという格言を体現しているかのようにある。それにはかつての失敗を教訓にしているようだ。

初めて大関に昇進したころは場所中でも銀座を飲み歩き、遊び呆けて基本的な生活習慣を軽く考えていた。若いので回復力もあったのだから。ところが片膝を怪我し、かばいながら相撲を取っていたのもう一方の膝まで壊してしまった。追いかけるように基礎疾患まで併発してしまい、序二段まで陥落してしまう。本来ならばここで相撲人生は廃業なのだが、彼はここから踏ん張った。両ひざには痛々しいテープをぐるぐる巻いて、決して勝っても驕らず一番一番に全力を尽くして、ついに七月場所では横綱に昇進を決めた姿にはあっぱれという誉め言葉がよく似合う。

今年六月、絶望の淵に追い込まれながらも再起を期して這い上がっていく選手二人の肖像を、私は自分自身病院のベッドの上で描いた。描きながら二人が不可能を可能にしていけるパワーがどこから来るのかを思い、更なる飛躍を願っていた。あやかるものならばあやかりたい、という思いも込めて。

日展会員 白日会会員 日本彫刻会正会員

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

御感想をお寄せ下さい。

<https://douzou.jp/>

上床利秋

検索

バックナンバーも読むことができます。



レモン画材絵画教室 ご案内

- 隔週水曜日 10:00～ 油絵・水彩教室
- 隔週土曜日 16:00～ 油絵・水彩 教室
- 隔週日曜日 16:00～ デッサン
- 隔週土曜日 ①10:00～ 子供絵画教室
②13:30～
- 月1回 第2火曜 10:00～ 和紙ちぎり絵教室



お申し込みは TEL 0995-45-1015
国分進行堂・レモン画材まで